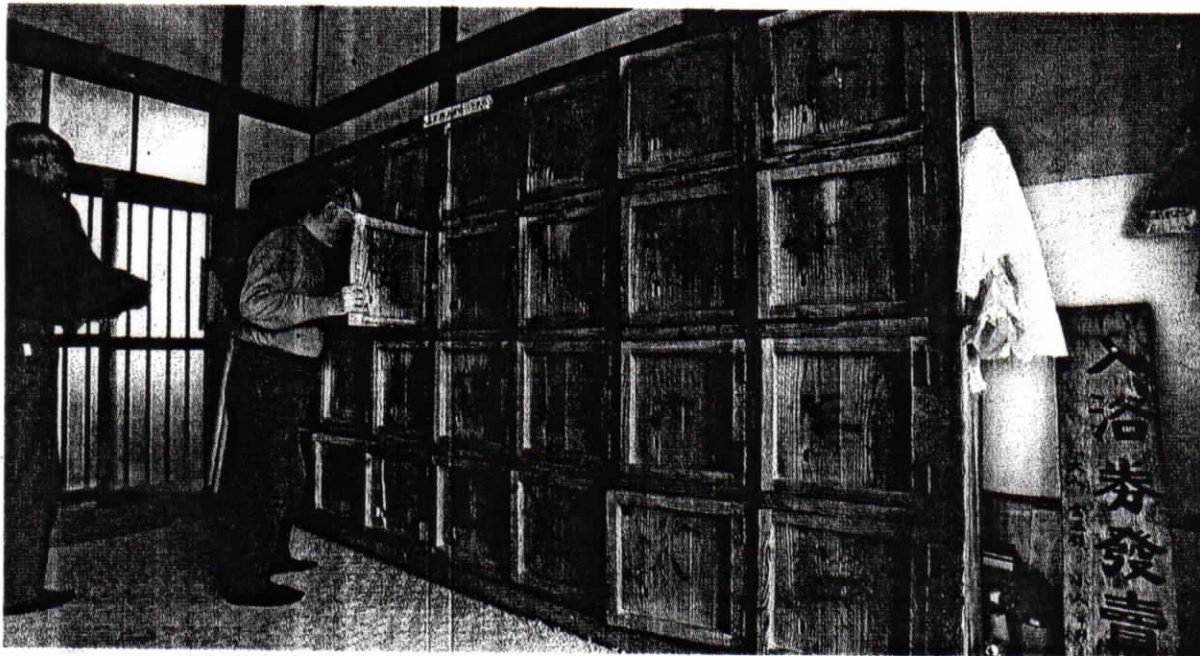


古湯を歩く

おばま 小浜温泉 (長崎県)

温泉教授 松田 忠徳

放浪の俳人癒やす海の湯



「協浜共同浴場」の木製ロッカーは1937年から使われている(長崎県雲仙市)

雲仙の「山の湯」に対して、「海の湯」と呼ばれていた小浜に、山頭火が行乞の旅で立ち寄ったのは、昭和七年(一九三二年)二月のことだった。

「まだ風雨が降り続いておるけれど出立する、途中千々石で泊まるつもりだったが、宿といふ宿で断られつづけたので、一杯元気でこまで来た」(「行乞記」)

山頭火は風雨のなか、小浜まで五里(約二十キ)も歩いたのだ。

山頭火は家庭を捨てて出家した俳人であった。ころり往生を遂げることが念願の放浪の俳人を、優しく迎え入れてくれたのはいつも温泉である。

さびしくなれば湯がわいてある

山頭火のこの句ほど、温泉と温泉を取り巻く人びとの優しさを詠んだ詩歌は他に知らない。



沈む夕日を眺めながら入浴できる「波の湯」

▽交通 JR長崎本線諫早駅から雲仙方面行き長崎県営バスで約五十分、小浜下車。

▽温泉 食塩泉、八〇—一〇〇度(源泉により異なる)。「波の湯」は入浴料三百円。午前七時—午後十時、午後一時—午後八時(平日)。不定休。

▽今回の宿 旅館國崎(創業一九七二年) 長崎県雲仙市小浜町南本町一〇—八

☎0957・74・35



浴料三百円。午前七時—午後十時、午後一時—午後八時(平日)。不定休。

▽今回の宿 旅館國崎(創業一九七二年) 長崎県雲仙市小浜町南本町一〇—八

☎0957・74・35

「山頭火が好きだった、酒の友の湯豆腐をイメージしてみよ」と、國崎のご主人、井上剛さん。

二泊することになった永喜屋の建物は、國崎の隣に現存する。

「この湯は熱く量も多い、浴びて心地よく、飲んでもうまい」「海も山も家も、すべてが温泉中心である、雲仙を背景としてある、海の青さ、湯煙の白さ」(「行乞記」)

放浪の俳人は小浜の温泉と立地の特性を的確に見事にとらえていた。

山頭火は小浜で共同湯に入ったようだ。当時の風呂はもうない。その代わり山頭火が小浜を訪れた数年後に建てられた「協浜共同浴場」がある。すっかり老朽化したものの風情ある建物は、山頭火が再訪したなら、その琴線をくすぐらずにはおかないだろう。

私には四、五年ぶりの協浜共同浴場である。開業当時のままの温泉効用書も、裸電球がひとつぶら下がった風呂場も変わらなかつた。浜のお年寄りたちの表情は仏顔であるのも。

ここにあるのは、昭和の初期に山頭火が訪ねたころのまんまの小浜の原風景に違いない。この食塩泉のぬくもりは、そのまま浜の人々の温かさでもあった。

温泉街の一角に「小浜町歴史資料館」があった。江戸時代初期に島原藩主松平

▶次回は熱海温泉(静岡県)を訪ねます

日経HR

キャリア × 日経

= 価値ある転職

日経キャリアNET

http://career.nikkei.co.jp

日経転職サイト

掲載に関するお問い合わせ → (株)日経HR 営業グループ

E-mail: webciqyo@nikkeihr.co.jp

先客が一人、露天風呂に浸りながら悠然と文庫本を読んでいた。彼は本を読みながら、茂吉を讀んだ。落日を待っていたのだ。

(札幌国際大学教授)